

6. 受賞者活動事例発表

(1) 岡部篤男氏(「株式会社げんきの郷」常務取締役)

それでは発表させていただきます。本日の受賞にあたり、多くの皆様のご支援、ご協力に深く感謝申し上げます。また同じ熱き心を持って利用者の期待に応えてきた出荷者の皆さんと、この喜びを分かち合いたいと思います。それでは「げんきの郷」の取り組みについてご報告します。

まず私ども「げんきの郷」は愛知県知多半島の北東部にある大府市にあり、すぐ隣は名古屋市という都市近郊農業の立地にあります。「げんきの郷」の母体はこの知多半島を管内とする愛知知多農業協同組合であり、組合員数6万2千名、貯金高8千9百億円と全国有数のJAでもあります。

この「げんきの郷」は、JAの子会社として平成12年12月にオープンし、8年を経過します。この8年間での来場は1千5百万人を超え、毎年2百万人以上が来場、平日でも4百台ある駐車場は満車状態です。当初の想定は70万人ですので、その3倍の来場に今もって驚いています。したがって事業取扱高も38億円と当初の想定3倍、なかでも直売所は花と合わせ、23億円をあげ、生産農家および地域農業に大きな効果をあげております。

この「げんきの郷」の整備にあたっては、JAが30億円を投資、この30億円は8年をかけて毎年の利益の中から積立て、まさしくJAの地域農業変革への強い覚悟、そしてそれを認め理解してくれた組合員がいたからこそ建設が実現しました。働く私たちとしても、組合員の貴重な財産を投じた「げんきの郷」だからこそ、成功の2文字しか頭には無く、後に引くことのできない背水の陣の覚悟でスタートをきりました。1年間がむしゃらに、出荷者と一体となって頑張ったからこそ今があり、その当時のことを思い出すと熱いものがこみ上げてきます。

つづいて「げんきの郷」の事業ですが、背後に農村風景が広がる中、5.3ヘクタールの敷地に農産物直売所はなまる市、花の直売所「さんハウス四季」、加工施設できたて館、和食レストラン「だんらん亭」、そして天然温泉「めぐみの湯」があり、平成17年にはカット野菜、弁当なども取り扱う「あくり工房」を近隣に整備しました。このように「げんきの郷」は、健康をテーマに農と食に対応する事業を展開しており、一部国庫補助を導入しておりますので、補助事業名では都市農村交流複合拠点施設とされ、農家と消費者を結ぶ交流拠点、地域農業を発信する施設だとも思っております。

私たちの目指すものは、「げんきの郷」の的確な運営はもちろんですが、その前提となる地域農業の変革、活性化こそが最大の目標です。その目標がここに紹介するアグリルネッサンス構想です。アグリは農業、ルネッサンスは復興、いわゆる農業復興構想です。農と食、環境と福祉、文化をテーマに健康安全な地域づくりをすすめるようとするものです。

よくJAの中では3年を単位に地域への振興計画を設定するのが通常ですが、当時私たちは農業の改革は車のハンドルをきるように、急に進路変更すること

はできない。少しずつハンドルをきりながら、やっとな改革という道に進路変更できるものとし、10年の目標づくりをすすめました。また振興計画の設定は現状の問題点をみだし、問題点を改善解決する課題を整理し、その対応策をまとめたのが振興計画となりますが、これを私たちは現状の農業を全て白紙にし、まっ白なキャンパスの上に10年後のあるべき姿を描くことでこの構想を策定しました。

その基本的な考え方は、地域から幅広く支持される農業の展開であり、地産地消の考え方が明確に打ち出されました。加えて健康をテーマにすることにより、地域からの支持は確実なものになるという強い信念をもって策定しました。

具体的にはそのひとつである、土づくりの目標は、健全な大地に健全な作物が宿る。そしてそれを食する人は健康になる。健康な人が集まれば地域は健康になる。そんな農業を発信したいという思いです。

第二の農食一貫システムの構築では、地域のひとびとの口に入るまで農業として責任を持つというもので、つまり生産という一次産業にとどまるのではなく、消費まで含めた一次、二次、三次まで達した第六次産業として地域の農業を確立したいという高邁な目標を設定しました。それを実現するモデルとして「げんきの郷」を中心に地域誘導目標が制定され、それは地元行政の町づくり計画にも反映され、着々と進行しております。

この構想づくりから「げんきの郷」オープンまで10年をかけて、農家代表、消費者代表をはじめ、地域から多くの意志を集約して、「げんきの郷」が整備されました。ですからオープンと同時に農家、消費者とも自ら率先して参加し、それがより多くのひとびとを惹きつけ、年間200万人を超える来場になったと思っています。これがもし多くのひとびとの意見を聞かず、JAのみの構想であったなら今の盛況はないでしょう。また農家の意識が変われば行動は変わります。国の政策やJAの助成に頼ることなく、農家が自立の意識に燃えた時、地域農業の元気な兆しがみえてくることを、「げんきの郷」に参加する農家から教わりました。そしてなによりも平成の初期に、新たな時代を的確に認識し、構想づくりにあたった先人たちの先見性に感謝しております。オープン当初のある先人の言葉が思い出されます。10年後にきっと「げんきの郷」は世間から評価される。今それが実現したのです。

ここに気がつけば地産地消と書きましたが、私たちの目標は地域農業の活性化であり、消費者が周りにいっぱいいるという都市近郊地帯だからこそ、直売所を主体に地域のかたがたに農業の情報を発信する農業振興施策をとったのです。決して物売り優先の箱ものとしての直売所の考え方ではないこと、つまり売れるからといって何でも売っていいとはしていません。ものがないからといって、他から仕入れるのではなく、ないなら農家につくってもらおうとしています。消費者は地元のを求めて来場するわけですから、それは当然であり、年間をとおして努力すれば何でもできる知多半島の立地を生かし、限りなく100%に近い産直比率を目指していきたいと思っています。もし売れるからといって、全国から多くの農産物を「げんきの郷」が仕入れるとしたら、それは地域農業を活性化する目標とかけ離れ、地域農業を冒瀆する「げんきの郷」になってしまいます。地元のを求めて来場する利用者の期待を裏切ること

にもなります。かたくなに頑固にこだわりをもって、この基本を貫きたいと思っております。

このような考えのもと、私どもの直売所、ファーマーズマーケットはなまる市には727名の出荷者が参加しています。専業農家はもとより、高齢者の生きがい農家、女性の参加も多くあります。地産地消を推進する上で、小回りのきく農家をどれだけ集められるかがポイントです。そういった意味で、高齢者、女性といった新たな担い手、私たちは潜在的な担い手といっております。このかたがたの参加が農業という活動をつうじた仕事づくりになり、新たな仕事づくりが農地の荒れ地化を解消し、また女性の参加は農産加工品といった食の領域まで踏み込んだ農業展開を可能とし、直売所での安定的な所得確保が後継者を生み出すといった「げんきの郷」への参加は、地域農業を元気にしてきています。

私どもは出荷する農家に常に利用者の目線でといっております。ですから出荷者に対して「NO!」といえる「げんきの郷」でありたいと思っております。それはみんなで決めたことで、それをきちんと守る、ただそれだけです。たった一回、たった一人といった利用者の期待を裏切る行為が、「げんきの郷」のみでなく、地域農業をだめにしてしまいます。4万人を超える「げんきの郷」の支持者である、利用者会員の期待は高く、その期待に応える努力を怠ってはならないのです。

また私どもは、安かろうではなく、地域農業を発信する施設ですから、質を重視した価値基準を基本としています。店頭に並ぶ農産物をみて、知多半島ではこんな立派な農産物をつくっているのだね、という評価をいただきたいのであって、安いけどこんなものしかつくっていないの、という声であってはならないということです。つまり質を重視し、良質を基本に安定価格での販売としております。ですから出荷基準は厳しいものがあり、基準から外れるものは出荷者にことわりなく店頭から撤去します。さらに、みんなで決めたルールを守らない出荷者、消費者の期待を裏切る出荷者は除名としております。

また安全対策にも万全を期し、安全対策基金を創設、約2千万円の原資で農薬検査など行い、万が一がないように努めています。農産物も食料品という考えのもと、自己の都合に甘えることなく、出荷者も一人の経営者という概念を持ってともに努力しております。繰り返しますが、たった一回、たった一人の軽率な行為が全てを無にします。100 - 1 = 99ではなく、ゼロということです。もし「げんきの郷」の米から無登録の農薬が検出されるとの見出しが新聞に載ったとするなら、「げんきの郷」は消滅するであろうし、知多半島の米農家が信頼を回復するのに何年かかるでしょうか。食の信頼を裏切る最近の事例をみれば、それは火をみるより明らかであり、安全対策を徹底していかななくてはならないと痛感しております。

以上直売所の活動を中心に地産地消の取り組みを紹介しましたが、今盛んに叫ばれている食育について考えてみたいと思います。「げんきの郷」では農業理解のため、農と食に関するイベントを年間をとおして実施しています。食育とはそんなにかしこまらず、普段ある農村風景、農村文化の発信であると思っております。農業者側からみると普段気付かない何気ない風景も、消費者側から

みると、とても新鮮で心豊かで満足感が得られるものとなるでしょう。ある週末のひと時、「げんきの郷」の広場で弁当を広げる家族連れがいました。その家族は目の前に広がる農村風景をみながら、こんなのかな環境で食べる弁当は本当においしく、心も癒され最高の気分だといわれました。私たちにとっては、普段みるなんの変哲もない風景なのですが、この感覚の違いだと思います。今日お集まりの皆さんも農業者側の視点ではなく、利用する側、つまり利用者の目線で捉えた時、新しい世界がきっとみえてくると思います。

直売所を通じての、ものの小売りを一歩進めて、情報発信、体験という付加価値をつけた農家と消費者の心の交流ができたとき、その前途はさらに広がり、地域から支持される真の地産地消ともいうべき、地域農業の安定的な将来がみえてくるものと思います。そのために本日の受賞を励みに、今後とも知恵を出し、出荷者と一丸となって、農と食のあふれる「げんきの郷」づくりに努力していきたいと思っております。これをもちまして「げんきの郷」の報告とさせていただきます。ありがとうございました。



1-1. 知多半島・JAあいち知多の概要

JAあいち知多は知多半島一円のJAとして、平成12年4月1日、3JA(知多、東知多、西知多)の合併により誕生しました。知多半島は、伊勢湾と三河湾に囲まれ、東西4km～14km、海岸線の総延長は、83km余りで、面積は391km²、5市5町からなっています。

知多半島の概要

農業粗生産額		農業粗生産額	
平成18年生産農産所得統計(単位:億円)		平成18年生産農産所得統計(単位:ha)	
品目	粗生産額	品目	作付面積
乳用牛	71	タマネギ	32.9
花き	62	キャベツ	18.0
鶏	60	パレisho	9.3
野菜	56	フキ	8.4
果実	46	レタス	7.3
米	35	ダイコン	6.0
肉用牛	2.9	スイートコーン	5.5
豚	2.6	サトモ	5.0
その他	1.4	ブロッコリー	4.4
管内計	393	ナス	4.1

農家戸数・専業別農家数
(2015年世界農林業ワ92・平成17年2月1日現在/単位:戸)

総農家戸数	専業農家			自給的農家
	主業農家	専主業農家	副業的農家	
8,440	4,794	1,259	1,005	2,530
				3,646

1-2. 知多半島・JAあいち知多の概要

JAあいち知多のようす

組合員数 (平成20年3月31日現在) 単位:人

事業部別	正組合員数	准組合員数	合計
大府	1,461	6,066	7,527
東海	1,259	3,890	5,149
東海	1,672	3,978	5,650
阿久比	1,143	2,635	3,778
知多	2,262	6,402	8,664
常滑	2,744	8,379	11,123
半田	1,854	3,393	5,247
武豊	1,031	3,674	4,705
美浜	1,854	3,119	4,973
南知多	1,716	3,232	4,948
合計	16,996	44,768	61,764

主要事業取扱高 (平成19年度末)

貯金残高	8,889億円
貸付金残高	1,908億円
共済保有高	2兆1,934億円
販売品販売高	94億円
(うち穀類)	(8億円)
(うち野菜)	(25億円)
(うち柑橘)	(13億円)
(うち花卉)	(20億円)
(うち畜産)	(28億円)
生産者直売売上高	24億円
営農購買品供給高	60億円
(うち営農購買)	(23億円)
(うち畜産購買)	(31億円)
(うち農機購買)	(6億円)
生活購買品供給高	67億円
(うち一般生活購買)	(5億円)
(うち店舗購買)	(27億円)
(うち燃料購買)	(35億円)

2. げんきの郷の概要

- 運営主体 株式会社げんきの郷 (JAあいち知多100%出資)
- 設立 平成12年3月1日 (当時JA東知多)
- 開業 (第1次オープン) 平成12年12月23日
(第2次、グランドオープン) 平成13年12月8日
- 資本金 1億円
- 建築等事業費 (固定資産はJA資産として保有)
内部資金造成 3.4億円 (うち施設整備資金 3.0億円)
国庫補助金等助成額 約5億円
・国庫補助金 (はなまる市、できたて館、だんらん亭、あすなる舎)
・県補助金 (広場整備)
- 所在地 愛知県大府市吉田町正右工門新田1-1
- 役員 代表取締役1名、常務取締役1名
取締役5名、監査役2名
- 社員 232名 (平成20年4月1日現在) うち正社員45名

3-1. げんきの郷の現状

12年度 13年度 14年度 15年度 16年度 17年度 18年度 19年度 千人

582 2,017 2,143 2,153 2,212 2,108 2,175 2,101

来場者 通算1,549万人

- 平成12年12月オープン (8年経過)
- JAあいち知多が投資 (30億円)
- 年間200万人以上が来場
- 事業取扱高38億円 (19年度)

3-2. げんきの郷の現状

各施設配置図

できたて館
だんらん亭
めぐみの湯
さんハウス四季
ふれあい広場
はなまる市

4-1. 目標は、農業・JAの変革をめざす「アグリルネッサンス構想」

アグリルネッサンス事業の目標

「農と食、環境と福祉、文化」を
テーマに、健康・安全の地域づくり、

土づくりを基本とした有機農業の実現
生産から消費まで「農・食」一環システムの構築
農・商・工・観光と連携、地域複合(6次)産業の形成
農業・農村文化の再生
少子化高齢化社会の対応

4-2. 目標は、農業・JAの変革をめざす「アグリルネッサンス構想」

構想10年
農家、消費者の
意思が反映

交流農園ゾーン

農住ゾーン

産業ゾーン

自立する農家が
地域農業を
変える

JAのついでに
げんきの郷

生産ゾーン

福祉ゾーン

食事業との連携

利用者の期待に
どう応えるか

5. 気がつけば「地産池消」

・「地産池消」は、都市近郊農業だからこそ

・「地産」のこだわりこそ他との差別化
～直売率80%

「産直比率」は80%以上

はなまる市	さんハウス四季
79.9%	83.2%
合計	
80.5%	

6. 農産物直売所「はなまる市」

農家の愛が、食卓の笑顔につながります

順調な売上実績(平成19年度決算書より)

売上高(千円) 1,956,044

出荷者の売上高・出展点数(第8回出荷者のついで14日)

3,000万円以上	2,000万円以上	1,000万円以上	500万円以上	100万円以上	10万円以上	5万円以上	3万円以上	1万円以上	5千点
6名	6名	16名	45名	207名	5名	17名	26名	130名	78名

出荷点数10,000点以上178名 単位:点数

1位	食品加工品	561,770	5位	ネギ	173,316
2位	猪肉・加工肉	312,912	7位	イチゴ	164,364
3位	玉子	270,294	8位	キュウリ	156,588
4位	トマト	237,959	9位	キャベツ	142,454
5位	菌茸類	221,396	10位	大根	141,954
総点数		4,717,567			

地域別出荷者数727名

大府	275名	常滑	13名
東浦	181名	半田	14名
阿久比	119名	武豊	8名
東海	72名	美浜	15名
知多	28名	南知多	2名

7. 良質(安全も含め)が基本

農家の顔が見えるから安心、リピータの増大

- ・バーコードの氏名は出荷者の自信と責任、安心感を提供
- ・「げんきの郷カード会員」(はなまる市、さんハウス四季利用)は4万名超(平成14年2月1日より使用開始)
- ・「カード会員代表者」と「出荷者代表者」との交流会を開催(年1回)

より充実した運営をめざした出荷者の組織活動

- ・第7回出荷者のついで 平成20年2月1日(毎年2月開催)
- ・安全、安心を目指した出荷者の確認
- ・出荷者の申し合わせ
- ・安全対策基金の創設
- ・検査 自主検査(出荷者自らの検査:週3回)
- ・残留農薬検査(JAあいち知多食品安全分析センター:年400検体)
- ・畜産物を含む出荷物、加工品の細菌検査
- ・生産履歴管理
- ・生産履歴の記載(私の生産日誌:平成15年4月~)
- ・生産履歴管理システムの導入(平成20年4月~)

8-1. 地域農業の情報発信基地をめざして

田圃ウオーキング(牛舎)

たまねぎの収穫体験

産消交流

物から心の交流へ

・求められる「発信能力」

・「農食一環体系」の確立こそ最終ゴール

米づくり体験(田植え)

トウモロコシ収穫体験

8-1. 地域農業の情報発信基地をめざして

8月 オクラ収穫体験 **産消交流** ラッカセイ収穫体験 9月

10月 米づくり体験(餅つき) 11月

米づくり体験(稲刈り) コスモス摘み

JAあぐりタウン
げんきの郷